湯川武先生追悼特集

湯川さんの思い出

保坂　修司
日本エネルギー経済研究所研究理事

湯川さんを偲ぶ会でお話しする永田雄三先生

一　はじめに

二〇一四年三月に湯川さんが亡くなられたとき、わたしは仕事でサウジアラビアに出張していた。湯川さんの死を伝えてくれたのは、わたしの学生時代の友人で湯川さんの教え子でもある上田祥市くんで、フェイスブックのメッセージ欄に連絡を入れてくれたのである。あわてて日本にいる妻（やはり湯川さんの教え子）に電話してみたが、まだ妻には連絡がきておらず、何でサウジアラビアにいたほうが早いんだとやけに感心してしまったことを思い出す。

そのときわたしはサウジアラビア外務省付属の外交研究所と日本国際問題研究所のあいだの意見交換の会議に参加するため、リヤードに滞在していた。ちょうど会議で発表しなければならなかったので、その場を借りて、湯川さんのご冥福をお祈りさせていただいた。遠いサウジアラビアだが、ここはイスラームの聖地マッカとマディーナを抱える国、イスラーム研究者である湯川さんの冥福をお祈りするには悪くない場所であろう。なお、この会議には、湯川さんと同時期に早稲田大学イスラーム地域研究機構に在籍し、湯川さんの教え子でもある貫井万里日本国際問題研究所研究員もいっしょであった。

発表が終わったあと、会議に出席していたサウジ人たちが湯川さんのことを尋ねてきたので、いろいろ説明したのだが、はたしてうまく伝わったかどうか。さすが、サウジ人だけあって、湯川さんはイブン・タイミーヤの著作を日本語に訳した人だといったら、その点についてはだいぶ興味をもってくれたようだった。

そういえば、湯川さんの還暦のパーティーのときも、わたしはエジプトのカイロに住んでいたので、出席がかなわなかった。タイミングの悪さはさすが不肖の弟子、といったところだが、教え子として湯川さんの一大事に居合わせられなかったのは痛恨の極みである。せめてもの救いは二〇一四年一月末に慶應病院に入院中の湯川さんをお見舞いできたことであろう。たまたまそのとき在レバノン日本大使館に勤務している後輩の山中啓介くんが一時帰国中だったので、山中くんとその同級生の石丸由美さん、後輩で東洋大学教授の三沢伸生くん、そしてわたしの妻とで、面会可能かどうか確認もせずにおしかけてしまったのである。結局、湯川さんとお話できたのはそれが最後になってしまったので、今考えると、無理やりにでも押しかけておいてよかったと思う。

二　湯川さんとの出会い

湯川さんはわたしの学生時代の恩師である。その意味で本当なら湯川先生と呼ばねばならないのだが、あえてここでは湯川さんと呼ばせていただく。もちろん、最初は先生と呼んでいたのだが、「照れくさいか

らよせやい」といわれて、その後はだいたい「湯川さん」で通していたと思う。

わたしが慶應義塾大学文学部に入学したのとちょうど同じころ、湯川さんはプリンストン大学での留学から戻って、慶應の商学部の助教授に就任していた。湯川さんとの付き合いがはじまるのはわたしが史学科東洋史学専攻に進んでからだが、学部のころはアラブをやるのか、トルコをやるのか、イランをやるのか迷っていたので、かならずしも湯川さんとの接点は太くなかった。だが、大学院に入ってからはアラビア語を研究の中心にすえるようになったので、おのずと湯川さんとの付き合いも深くなっていった。

ちなみに当時、大学院で湯川さんの教えを受けていたなかで、今も中東業界に携わっているのはわたしのほか、現在、現代イスラーム研究センターの理事長をやっている宮田律さんぐらいである。したがって、アラビア語を勉強しているということからいうと、事実上、わたしが湯川さんの最初の弟子といえるかもしれない。

三　白十字にて

湯川さんの授業はほとんどマンツーマンだったので、必然的に授業は喫茶店でやることが多くなった。考えてみたら、湯川さんの「異変」に最初に気づいたのはその喫茶店であった。

場所はだいたい白十字という昔ながらの喫茶店だった。ここはその昔、詩人の西脇順三郎やその弟子の井筒俊彦などがよく通っていたという由緒あるところだったらしいが、わたしたちが通っていたころはそんな面影はまったくなくなっていた。おしゃれな慶應ボーイや慶應ガールが集まるところではなかったので、いついっても入れるし、なおかつ何時間いても怒られない、という稀有な場所だったのである。

現在の喫茶店白十字。ローマ字表記が変なのがもの悲しい。

おそらく白十字での最初の授業だったと思う。注文したコーヒーがきて、湯川さんが砂糖を入れはじめて驚いた。角砂糖だったか、山盛りの砂糖だったか、忘れたが、あれ、ずいぶんたくさん入れるんだなあと思ってから、さらにまた入れるというぐあいに、とにかく大量の砂糖を投入するのである。後年、湯川さんは糖尿病で苦しむことになるのだが、その予兆は相当早いころからあったわけだ。

砂糖だけではない。タバコもすごかった。当時、湯川さんは教室でもよくタバコをスパスパしながら授業をしていた。そのころはわたしもスモーカーであったので、白十字での授業では灰皿が吸殻でてんこ盛りになることも少なくなかったのである。猛烈なタバコの煙のなか、ほとんど雑談のような授業や購読を行っていたのだが、授業が終わるころになると、学部の学生たちも喫茶店に集まるようになり、そのままみんなで飲み屋へ直行というルーティンがいつの間にかできていた（あるいは逆に学部生が先にいてこちらがあとから合流だったかもしれない）。

四　つるの屋伝説

飲み会は三田の慶大キャンパスのすぐそばにある「つるの屋」という居酒屋で行われるのが大半であった。つるの屋といえば、慶應出身者なら、知らない人はいないというぐらいの有名店であるが、食べ物がうまいとか、めちゃくちゃ安いといった特徴があるわけではない。広くて、どんなに騒いでも怒られないとか、まあ、学生御用達の店といったところだろう。

それをいいことにここではずいぶん羽目を外させてもらった。われわれ以降の、慶應出身の中東研究者の多くがここで酒の飲みかたを覚えたといっても過言ではない。お恥ずかしいかぎりだが、わたしもこのつるの屋で、気づいたら便器を抱いて寝ていたといった経験がある。

このころはまだ湯川さんも若かったので、かなり無茶な飲みかたをしていた。飲みながら議論が過熱してくると、たとえば

学生が気に食わないことをいったりしようものなら、ベルトや腕時計を外してコブシにまいて殴りかかろうとする。もちろん、実際に殴ることはなく（たぶん）、まあまあとりなしが入って事なきをえるのがふつうであった（その役目はたいていわたしであった）。

考えてみると、当時のつるの屋には湯川さん以外にも哲学科の三浦和男教授ら猛者が集っていて、いつもどこかで人が倒れていた記憶がある。三浦教授はマルクスやヘーゲルの研究で知られた哲学者だが、同時に元重量挙げの選手とかで（伝湯川さん）、わたしが学生時代、すでにけっこうなお年だったはずだが、腕相撲をやらせたら、現役の体育会でも勝てないという怪力の持ち主であった。もちろん湯川さん自身、体育会出身だったので、気があったのかもしれない。よくつるの屋でいっしょに騒いでいたのを思い出す。

湯川さんも教え子との飲み会ということで気安かったのか、文字どおりへべレケになることも多く、しかたなく三田から無理やりタクシーに乗せて、ひばりが丘のご自宅まで送り返したことも一度ならずあった。

五　卒論置き忘れ事件

事件が起こったのは、まさにそのつるの屋で大騒ぎをしたあとのことであった。その日の飲み会は、学部生の卒論締め切りの直後ぐらいで、お祝いの意味を込めて、湯川さんとわたしのほか、卒論を提出した学生を含む湯川ゼミ生やその他もろもろが参加していた。案の定途中からドンチャン騒ぎになり、多くの学生が前後不覚に陥り、湯川さんもしたたかに酔っ払っていた。わたし自身もどうやって帰宅したのかまったく記憶にない状態であった。

翌日、湯川さんからわたしの自宅に電話があった。そして開口一番、「おまえ、卒論どうした？」とおっしゃる。わたしは湯川さんが何のことをいってるのか理解できず、思わず「えっ？卒論って何ですか？」と聞き返してしまった。すると、湯川さんは「もって帰ったはずの卒論が見当たらない」というではないか。湯川さんはドンチャン騒ぎの日、提出された学部生の卒論を審査するため、それらを袋か何かにいれて、家に持ち帰ろうとしていたのである。そして、あろうことか家に戻って、朝起きたら、それがないというのだ。つるの屋に訊いてみたけど、なかったという。

わたしはあわてて宴会に参加していた学生らに電話して、それとなく――湯川さんに何か預かってなかった？――という感じで訊いてみたが、誰も何も知らなかった。これはヤバイ、学生の卒論をなくしたとなれば、湯川さんのクビが危ないだけでなく、学生の将来にまで影響をおよぼしかねない。もちろん、卒論など盗む人はいないだろうから、誰かが拾ってくれれば、届け出てくれる可能性は高い。しかし、そこらへんにころがっていたら、何だこれと捨てられてしまう恐れも大きかった。

万策尽きたところに、湯川さんからまた

湯川さんを偲ぶ会風景

連絡があった。卒論が無事見つかったという。所詮他人事なのだが、正直、ほんとうに安堵した。幸いなことに、タクシーの運転手さんが届けてくれたらしい。湯川さんは池袋からタクシーで帰宅したのだが、そのときタクシーのなかに卒論を置き忘れたようだ。

これが――イスナードに多少怪しいところはあるが――湯川ゼミで代々語り継がれた（?）卒論置き忘れ事件の顛末である。こんなことを書いて、保坂はけしからんとご立腹のかたもいるかもしれないが、湯川さんの豪快伝説を後世に残す意味でも欠かせない逸話である。ご容赦願いたい。まあ、湯川さんもあちこちで「あのときはクビになるのを覚悟した」といっていたみたいなので、天国で苦笑いしながら許してくれるのではないだろうか。

そのほかゼミ旅行での大暴れなど、小生が実際に目撃しただけでも、湯川さんは、数えきれないほどの伝説を残してくれたが、短い紙数ではとても語りつくすことはできないだろう。

単に研究者としてだけでなく、教育者としても、これほど学生たちから慕われた人もそう多くはあるまい。湯川さんに結婚の仲人をしてもらった学生も数えきれないだろう。逆に、やれ花見だ、やれバーベキューだと、いろいろ理由をつけては湯川さんとつるみたがる学生たちのほうこそ教師離れできずにいるのではと、一先輩として心配になるぐらいであった。

六　湯川さんの跡を追って

わたしのほうはというと、あちこちをうろちょろしたあげく、湯川さんが示してくれた道から大きく外れてしまった。しかし、ふと気がついてみると、分野は異なるものの、湯川さんの切り拓いた道をいつの間にか歩かされていたような気がする。

湯川さんが在カイロ日本大使館の専門調査員をつとめてしばらくしたのち、わたしは在クウェート日本大使館・在サウジアラビア日本大使館で専門調査員として働くことになった。外務省の専門調査員というのはもともと、湯川さんのように、かなりシニアな研究者がつくポジションだったのだが、そうすると、大使館内の雑務でこき使えないという外務省側の勝手なつごうで、湯川さんが帰国するとやがて、専門調査員の若返りがはかられるようになり、（とくにヒマそうな）若手の研究者が飛ばされるポストになっていた。

湯川さんは、在カイロ日本大使館時代、年齢でいうと大使の次ぐらいだったので、ほとんど誰にも指図されず、好きな研究ができたと豪語していたが、もちろんわれわれの世代ではそんなことは許されず、わたしは、クウェートやサウジアラビアで湯川さんの時代をうらやましく思いながら時を過ごしていたのである。

その後、大学の教員としても湯川さんの影を追っていたが、こちらは家庭の事情で早々と転職してしまった。

また、湯川さんは学会活動でも重要な役割を果たしていた。たとえば、長年日本中東学会の理事をつとめ、また同学会年報（AJAMES）の第二代編集委員長にもなっている。実はわたしも、何代目かわからないが、本稿執筆時点では湯川さんと同じ仕事を仰せつかっていたのである。

七　おわりに

二〇一一年にイスラーム地域研究の推進役だった佐藤次高早稲田大学教授が亡くなり、二〇一四年三月に湯川さん、そして同年九月には、わたしのアラビア語の先生である牧野信也東京外国語大学名誉教授、というように、お世話になった先生がたがあいついで鬼籍に入られた。

現代の中東研究を専門とする身なので、とくに若いころは、こうした先生がたの研究が直接役に立つことはあまりないだろうと不遜にも考えていた。わたしは、仕事がら現代のイスラーム過激組織についてテレビや新聞で語ったり、雑誌に寄稿したりすることが少なくない。実は、そのたびに、

偲ぶ会で展示されていた湯川さんの著書。自著を奥さまに謹呈されているのがすばらしい

そして最近になればなるほど、こうした先達たちの古典研究がいかに重要かということを、痛感させられるようになっている。

たとえば、牧野先生のアラビア語の授業ではアブルファラジュ・イスバハーニーの『詩の書』からはじまり、あとはずっとクルアーンやハディースを読まされていた。そのときは正直、いったいこれ何の役に立つんだろう、と悶々としながら授業に出ていた。しかし、このときの経験がアルカイダのリーダーだったオサーマ・ビン・ラーディンやザルカーウィーの声明を理解するのに、どれほど役に立ったか。（余談だが、予習を忘れてしまったときなどは、牧野先生を無理やり喫茶店（もちろん白十字）にさそってよく授業をつぶしていたのだが、そのとき牧野先生から、先生もその昔、井筒先生と白十字にきていたという話を教えられた）。

また、二〇一四年六月ごろから突然、注目を集めたイラクやシリアを拠点とするテロ組織、いわゆる「イスラーム国」は、カリフ制や奴隷制の復活を宣言するなど、その独特なイスラーム解釈で知られていた。彼らの思想を理解するのに、もっとも役に立ったのは、実は湯川さんが翻訳したイブン・タイミーヤの『イスラーム政治論』であり、マーワルディーの『統治の諸規則』だったのである。湯川さんたちの研究は、中東地域が混乱の極みにある今こそ必要とされているのかもしれない。

謹んでご冥福をお祈りします。

霞友会館で開催された慶應の退職記念パーティーにて
スピーチをする湯川さん

同退職記念パーティーにて。奥様（湯川さんの右隣り）、
そして筆者（前列左端）を含む教え子たちとともに

故湯川武先生の略歴と主要著書

［略歴］

一九四一年八月、兵庫県生れ。六八年、慶應義塾大学大学院文学研究科修士課程修了。七二年、カイロ・アメリカン大学アラブ研究科修士課程修了。七三年、慶應義塾大学商学部助手。七七年、同助教授。八八年、同教授。九七年、学校法人慶應義塾常任理事（二〇〇一年まで）。〇七年三月、慶應義塾大学定年退職。同年、慶應義塾大学名誉教授、早稲田大学イスラーム地域研究所客員教授（のち早稲田大学イスラーム地域研究機構研究院教授）、人間文化研究機構（NIHU）地域研究推進センター上席研究員。一一年、NIHUプログラム・イスラーム地域研究・研究代表（早稲田大学中心拠点代表）。人間文化研究機構地域研究推進委員会委員（一二年まで）。一二年、早稲田大学イスラーム地域研究機構招聘研究員。

［主要業績］

『シャリーアによる統治――イスラーム政治論』（イブン・タイミーヤ著、共訳、日本サウディアラビア協会、一九九一年）
『クロニック世界全史』（共編、講談社、一九九四年）
『イスラーム国家の理念と現実』（編著、栄光教育文化研究所、一九九五年）
『世界史事典』（共編著、角川書店、二〇〇二年）
『アラブの人々の歴史』（アルバート・ホーラーニー著、監訳、第三書館、二〇〇三年）
『統治の諸規則』（アル＝マーワルディー著、翻訳、慶應義塾大学出版会、二〇〇六年）
『イスラーム世界の知の伝達』（山川出版社、二〇〇九年）